

2020年1月

「令和」という時代が明け、「やっぱり、日本に年号があって良かったなあ。毎年12月が終わって1月が来るといっただけのくり返しでは気分転換もできない」などと、「平成の時代」のあれこれを思い起こしつつも、少しだけ「新しい空気」を吸い込んだ気分で迎えた新年は驚きの連続でしたね。

長くアフガニスタンの地で、中村哲医師は「ペシャワールの会」代表として、医療支援にとり組んだばかりではなく、独学で建設用の重機の操作や土木工事の進め方を学び、遠くは戦国時代の日本で発達していたという、地元の人たちに仕事と収入をもたらす手作業を現代工法と組み合わせて活用し、広大な水路網を建設しました。

この事業により、砂漠化した大地は緑野に変わり、難民として古里を去っていた

65万人もの人々が耕作地を得て帰国でき、テロ集団に加わらなくても安定した生活の道を開くことができたのに、その中村先生が凶弾に倒れるという、何とも無念なニュースが飛び込んできたのです。

そして、十年前、瀕死の日産を救い、一時は「さすが経営のプロ」と賞賛を浴びていたカルロス・ゴーン氏がスパイ小説もどきの自家用ジェット機により日本を脱出し、レバノンの首都ベイルートで「私はここにいるよ」とばかり各国記者を招いて2時間以上の独演会を世界中に発信したのです。かと思えば中東ではイランと米国が戦争前夜の緊張した状況に陥ってしまいました。

第二次大戦後、融和と統一に向かって進んできたヨーロッパではアフリカなどからの百万人を超える難民の流入を前にして、各国での「自国ファースト」の高まりは英国のEU離脱本決まりとも相まって、複雑な民族対立が復権を目指すロシアの動きもあり「微妙な事」になっています。

加えて、日本を取り巻くアジアでは覇権主義を隠そうともしなくなった中国と「自由の守護神」の立場に疲れてきた米国の軍事、さらには先端技術と貿易を巡る紛争が若干改善の方向に動き出したものの予断は許さず、日本の立場も微妙になってきました。北朝鮮はあからさまに米国を非難し続け、核武装路線の放棄は不透明です。不法に拉致された人々の帰国はますます難しくなっているのではないのでしょうか。

そして、悲しい事に、なんとしても過去50年以上に積み上げられてきた韓国と日本の「合意」を否定したい文政権。

こうした中、過去30年もスイスのダボスで開催され続けてきた「ダボス会議」が環境問題一色というのに、その場に毎年のように家族ぐるみで出席して、各国の要人と互いの親交を深め合っている日本のリーダーはおらず、長期政権のたるみか、「桜を見る会」だの「選挙のウグイス嬢への謝礼が法定価格の2倍だ」だの、一体どうしたもんなんでしょう。

ともかくも、毎朝、仏様に向き合って、朝のお勤めだけは欠かさずさせていただき、皆様のご安泰とご多幸を、さらには世界が平安でありますようにご祈念いたしております。

人並みに、「ともかくも、半年後に迫ったオリンピックとパラリンピックが成功し、人々、特に若い人たちに新しい希望が宿るような結果をもたらしますように」と祈るばかりですが、温暖化の影響からか、これまで経験しなかったような強力な台風が次々と本州を直撃するような時代となり、なかなか「良いはなし」に巡り会えない毎日に内心心穏やかならない時間を過ごしております。

それにしても、一秒一秒、時間は間違いなく動き、歴史は淡々と新しいページを重ねています。

例によっていくつかの「新年互礼会」や「新年会」が過ぎました。私もそ

のいくつかに出席したのですが、その一つ、日本記者クラブの新年互礼会は
昨年の創立50周年大会に続いて出席いたしました。現役時代より出席者の
数は減り、その顔ぶれも変わってきましたが、久しぶりに20年以上昔から
の知り合いで、現在は中国の新聞の特派員である友人の顔を発見しました。

以前にもお話ししたことがあると思いますが、私は日本新聞協会という、
新聞・放送・通信社が自分たちで報道の倫理を向上させようと設立した団体
で30年以上働いていたのです。そのうち25年ぐらいは報道界の国際交流
事業にかかわっておりました。

文化大革命が終焉を迎えて、中国が鄧小平氏の指導の下で「現代化」を開
始した頃、文革時代にひどい目に遭っていた報道関係者に「日本を自分の目
で見て勉強させたい」という指導層の希望から開始された日中記者交流計画
には最初から参画を許され、様々な貴重な経験をさせていただきました。

その頃は日本の何を見ても驚くような中国の記者に、「日本は千年以上以前
から貴国の様々な文化、制度、技術を学んで発展してきました。今にまた、
お国から日本が学ぶ時代が来ますよ」などとはげますつもりで申し上げた事
もありました。ところが、そのころは「そんな気休めはやめて下さい」と涙
ぐむ人たちがいたのです。

当時、新聞協会は「アセアン記者連盟」という団体とも一種の研修計画で
中堅記者を毎年招待し、一番長い時で3か月、だんだんにアセアンの参加国
が増えて2か月、1か月となりましたが、ともかくこの計画も20年続きま
したから、その間、記者連盟の総会などには日本から招待されて参加する
ときがあったのです。

この団体のマレーシアでの総会に私が招待された事がありましたが、そこ
には中国の記者協会の幹部も招待されていたのです。総会后、地元の記者と
一緒に広大なゴム林の続く道をドライブし、それぞれの地域の人々の生活を
垣間見る機会もありました。

「中島さん。日本は進んでいる。だからわが国は毎年記者団を派遣しているのですが、正直なところ日本は進み過ぎています。だから、中国にとってはマレーシアのような国のほうが直接の参考になります」と、言われたことがあります。今から20年ぐらい前のことです。

いま、その中国は日本のGDPの4倍近い経済規模となり、「世界を指導して行くのは中国と米国だ」などと言い出しているのです。

しかし、建国から70年以上たっても、一度も中国の国民は自分たちの指導者を選挙したことがないのです。香港で半年以上続いている騒乱を見て、台湾では「これでは中国と一緒ににはなれない」と感じた人たちが沢山いたようです。自然界の変化といい、国際情勢の様がわりといい、遙かに人智を超えているようです。

改めて、社会の最小単位であり、最重要単位である家族のあり方、子育てと高齢化の兼ね合い、一人一人の人生のあり方など、じっくりと考え直して行かないと、この国の将来は決して明るくないのではないかと、思い悩み、またアルコールの過剰消費を家の者からきつく戒められてしまいそうです。

みなさまはどうか、お幸せに。